

フェルナンド・オルティスの 『タバコと砂糖のキューバ的対位法』をめぐる一考察(1) ——キューバ性とトランスカルチュレイションについて——

安保寛尚

Resumen

Contrapunteo cubano del tabaco y el azúcar (1940) de Fernando Ortiz (1881-1969) es uno de los ensayos más innovadores de las letras hispánicas en el siglo XX. El objeto principal de nuestro estudio es analizar el estilo y la estructura tan peculiares de esta obra y entender la idea y la estrategia de Ortiz en ella. Este trabajo es una parte introductoria para tal objeto y trataremos de aclarar su idea de mestizaje cultural representada en la imagen culinaria de ajiaco y en su teoría de transculturación. Nos centraremos en el tabaco, que es, según Ortiz, el símbolo de la cubanidad y soberanía por ser un producto altamente transculturado. Y trataremos de ver como Ortiz demuestra una actitud ambivalente y contradictoria en su búsqueda, por una parte, de la identidad mestiza descolonizada, y por otra, de la occidentalización o el “blanqueamiento” de la cultura cubana.

Palabras claves : フェルナンド・オルティス, キューバ性, トランスカルチュレイション, 混血のレトリック, タバコ

0. はじめに

フェルナンド・オルティス Fernando Ortiz (1881-1969) は, コロンブス, フンボルトに続くキューバの第三の発見者とも呼ばれる¹⁾。それはなにより, 民族学・民俗学研究によって, 様々な人種的, 文化的要素が錯綜するキューバの現実をそのルーツから解きほぐそうと試みた功績への評価といえるだろう。そしてオルティスは, キューバのアイデンティティがそれらの多様な要素の絶えざる「混血」に認められるとするレトリックを生み出した。その到達点が, キューバの人種的混血をシチューに喩えたアヒアコ (ajiaco) であり, 異文化間の接触で起こる文化変容理論としてのトランスカルチュレイション (transculturación) である。本稿はとりわけ, その文化変容理論が提起された『タバコと砂糖のキューバ的対位法』 *Contrapunteo cubano del tabaco y el azúcar* (1940, 以下『対位法』, 引用やページ数は2002年カテドラ版に従う) に焦点を当てる。

今福が「カリブ海の一クレオール文化の形成を克明にあとづけた文化史的な金字塔」(今福2015: 237) と評しているように, 『対位法』は, オルティスが「キューバ性 (cubanidad)」と呼

ぶキューバ混血文化のアイデンティティをめぐるテキストである。その一方で、『対位法』の構成を見ると、前半はタバコと砂糖をめぐる文学的エッセーであり、後半ではそれぞれの作物についての断片的な歴史・民族誌の章が交錯する。そのような分野横断の性格と特殊な構造によって、『対位法』はオクタビオ・パスの『孤独の迷宮』(1950)などと並び、20世紀スペイン語で著された最も革新的エッセーの一つとも評価されているのである (Santí 2002: 17)。タバコと砂糖の対照性を出発点としながら、西欧の知の領域を縦横無尽に駆け回るこのテキストの一節を見てみよう。

En el azúcar no hay rebeldía ni desafío, ni resquemor insatisfecho, ni suspicacia cavilosa, sino goce humilde, callado, tranquilo y agitador. El tabaco es audacia soñadora e individualista hasta la anarquía. El azúcar es prudencia pragmática y socialmente integrativa. El tabaco es atrevido como una blasfemia; el azúcar es humilde como una oración. Debí de fumar tabacos el burlador Don Juan y de chupar alfeñiques la monjita Doña Inés. También saborearía su pipa Fausto, el inconforme sabio, y sus grageas Margarita, la dulce devota. (...) Los psicólogos pensarán que el azúcar tiene alma objetiva, actualista y extravversa y que la del tabaco es subjetiva, ultraísta e intraversa. Quizás Nietzsche pensó que el azúcar es dionisiaca y el tabaco apolíneo. Aquélla es madre de alcoholes que dan la sacra euforia. En los humosos espirales del tabaco hay ilusivas bellezas e inspiraciones de poema. Quizás el viejo Freud llegó a pensar si el azúcar es narcísico y el tabaco erótico. Si la vida es una elipse con sus dos focos en el vientre y el sexo, el azúcar es comida y subsistencia y el tabaco es amor y reproducción.

(砂糖には反乱も挑戦も、不満足な恨みも、絶えざる不信もなく、あるのは慎まじやかでひっそりとした、穏やかで、ゆらゆらと揺れ動く楽しみである。いっぽうタバコには夢見がちで個人主義的な不敵さがあり、ややもすると無秩序なところがある。砂糖はその実用主義的な賢明さで、社会的に組み込まれる要素になる。タバコは不敬なほどに無遠慮だが、砂糖は祈りのごとく控えめだ。色事師ドン・ファンはタバコを吸ったろうが、ドニャ・イネスニは飴を舐めたに違いない。反抗的な知者のファウストはパイプをくゆらし、優しく信心深いマルガリータは砂糖菓子に目がなかったことだろう。(…) 心理学者は、砂糖には客観的で現実的で外向的な魂が宿り、タバコには主観的でウルトライスマ流の、内向的な魂が宿っていると考えるだろう。ニーチェなら、砂糖はディオニソスで、タバコはアポロンと考えたかもしれない。砂糖は神聖な幸福感をもたらすアルコールの母である。他方タバコの煙の渦には、人を欺く美とインスピレーションがある。おそらく老齡のフロイトは、砂糖がナルシズムなら、タバコはエロティシズムと考えるに至ったに違いない。もし生命が腹と性にその二つの中心を持つ楕円だとすると、砂糖は腹を満たす食料と生存で、タバコは性の欲求を満たす愛と生殖である。) (Ortiz 2002: 152-153)

擬人化されたタバコと砂糖は、『セビーリャの色事師と石の招客』や『ファウスト』の登場人物をそれぞれの側に引き寄せ、スペイン前衛芸術のウルトライスマ²⁾やニーチェの『悲劇の誕生』への言及でその象徴性を拡大し、ついには心理学者フロイトによる性格づけと精神分析を受け

るに至る。本研究の最大の関心は、『対位法』前半部のエッセーに見られるこのような特異な文体にある。ベニーテス・ロッホ Benítez-Rojo (1996) は、『対位法』における西欧の規範からの逸脱、バロック的不均衡と過剰の特徴に、ポストモダンに通じるカリブ的「カオス」を見だし、エンリコ・マリオ・サンティ Enrico Mario Santí (2002) は、『対位法』を19世紀の黒人詩人フランシスコ・マンサノ Francisco Manzano や、ホセ・レサマ・リマ José Lezama Lima の作品と同列に並べて、キューバ的ナショナリズムを包含した「野蛮スタイル」と評したのだった。しかし1992年、ハバナ芸術高等学院の学生グループによって編集され、雑誌『アルブール』*Albur* に発表されたオルティスの研究カードが、その文体の解明に新たな光を照射するように思われる。その研究カードは、オルティスが『対位法』執筆と並行して進めていた、チョテオ (choteo) というキューバの不敬なユーモアについての考察である。そしてそれらの分析から、『対位法』にはオルティス流の「知的チョテオ」の実践を見ることができると思われるのだ。

本稿は以上の考察に接続する前編 (1) として、トランスカルチュレイションに託されたオルティスの思想と戦略の解明に取り組む。このような迂回が必要なのは、オルティスがこの文化変容理論に基づいて特殊なチョテオを考案し、『対位法』という革新的テキストを生み出したと考えられるからだ。またその取り組みは、キューバにおいて、人種を超えた「キューバ人」と混血のアイデンティティのレトリックがいかに構築されていったかを検証する試みの一端を担うだろう³⁾。

第一章ではオルティスの生涯について、『対位法』が誕生するまでを概観する。犯罪法学者として出発したオルティスが、民俗学研究への着手、下院議員としての政治参加、そして『世界地誌』の共同執筆を経て『対位法』の着想に至る経緯をたどろう。第二章では、『対位法』で砂糖が異国性や植民地と関連づけられていることについて、当時のキューバにおける砂糖の言説に注目する。するとこのテキストは、砂糖の権力の言説に対する抵抗言説の一部をなすことがわかるだろう。そして第三章では、アヒアコとタバコのトランスカルチュレイションについて分析しよう。その結果、オルティスが提起したトランスカルチュレイションとは、何より、キューバに土着的で「野蛮なもの」が、西欧化による「進化」を経てキューバ性を獲得することであると理解される。ところがキューバ性の象徴とされるタバコが、ついには異国化の道を辿る。そのような『対位法』の結末が生む疑問と、後編 (2) に引き継がれる考察に言及しておこう。おわりに、オルティスの脱植民主義的戦略についてまとめ、そのアンビバレントで矛盾した態度を明らかにする。

1. 『対位法』への道のり

1.1 犯罪法学者オルティス

1901年、マドリード大学で民事損害賠償の研究で博士号を取得した⁴⁾ というのに、オルティスは焦っていた。犯罪学者コンスタンシオ・ベルナルド・デ・キロス Constancio Bernaldo de Quirós の『マドリードのふしだらな生活』*La mala vida en Madrid* が刊行され、活発な議論が交わされていた頃のことである。マドリード社会学研究所では、実証主義者マヌエル・サレス・イ・フェレー Manuel Sales y Ferré に指導を受けて犯罪学に高い関心を寄せ、周囲から注目されてい

たオルティスは、マドリードとハバナの「ふしだらな生活」の比較についてコメントを求められていたのだ。オルティスの焦りはもっともだった。ハバナに生まれたとはいえ、1歳でスペインのメノルカ島に移住した後、キューバで生活したのはハバナ大学法学部に通った1895年から1899年までの約4年間にすぎない。そこで、マドリード植民地博物館に展示されていた黒人宗教儀式で用いられる道具や衣装、楽器を見学し、トゥルヒージョ・モナガス Trujillo Monagas の『キューバの犯罪者』*Los criminales de Cuba* を参照したところ、オルティスの目に留まったのがニャニゴである。ニャニゴとは、1830年頃ナイジェリアのカラバル出身者がキューバで結成したアバクワ―秘密結社の信者のことで、当時誤った認識によって呪術師や犯罪者と同一視されていた。オルティスはそのような偏見を疑うことなく、ニャニゴの宗教実践の研究から出発して、「ハバナのふしだらな生活」というタイトルの書を著すことを決意するのである。

翌1902年、独立の熱気が渦巻く中でオルティスは帰国する。ハバナの下層社会や黒人宗教に光を当てると、様々な人種や文化の混淆によって、マドリードとは様相が異なることに気づいていく。こうしてオルティスの民俗学研究は出発した。そして同年、領事の職を得てイタリアに渡ったことが、初期の研究の方向性を決定づける。3年に及ぶイタリアでの生活で、オルティスは犯罪民族学者チェザーレ・ロンブローゾと交友を結んだのである。領事の仕事の合間を縫って、出国前にハバナで収集した資料の整理と分析に取り掛かったオルティスは、やがて研究対象の複雑さを知ることになる。そして、当初構想した「ハバナのふしだらな生活」から「アフロ・キューバの暗黒世界」*Hampa afro-cubana* と題する三部作を執筆する計画に変更する⁵⁾。1906年には、その第一部となる『黒人呪術師（犯罪民族学研究のためのメモ）』*Los negros brujos (apuntes para un estudio de etnología criminal)* がマドリードの出版社から刊行された。序文としてそのまま掲載されたロンブローゾからの手紙には、非常に興味深い書であること、また今後の研究では、呪術師の頭蓋骨や容貌の異常についてのデータを取得してはどうかという助言が書かれている（Ortiz 2001: 1）。結局、その後オルティスがその助言に従うことはなかった。しかし、『黒人呪術師（犯罪民族学研究のためのメモ）』におけるロンブローゾの影響は大きく、オルティスは実証主義的観点から、黒人の宗教儀式や呪術師は近代化を阻害する悪と見なし、法的処罰の必要性を訴えた。

1.2 政治家から民俗学者へ

オルティスは、かつて「太陽の沈まぬ帝国」と呼ばれたスペインの落日を見守った。1898年の米西戦争の結果、すべての植民地を失ったスペインでは、失望と悲観が社会に蔓延していた。まさにその頃、スペインとキューバを往復したオルティスは、近代化に遅れ、没落したスペインの姿を見ながら、キューバの将来を案じていた。1906年から1911年にかけて雑誌等に発表された論考集である『キューバ人よ共に…（熱帯の心理）』*Entre cubanos... (psicología tropical)* (1913) では、近代化を阻むキューバの民衆の精神性や、政治、教育の問題について警鐘を鳴らしている。このような姿勢が、やがてオルティスを政治家の道の選択に向かわせた。

しかし1917年から27年にかけて下院議員を務めたオルティスが目の当たりにしたのは、癒着と汚職によって米国に隷属状態にあるキューバ政治の現実だった。幻滅したオルティスは、やがて政治と法学から距離を置き、文化を基盤とするキューバのアイデンティティの模索の研

究へと舵を切る。おりしも、第一次世界大戦後、シュペングラーの『西欧の没落』（1918）のスペイン語訳が1923年に現れ、イスパノアメリカにおいても文化相対主義の思想が注入された時である。黒人文化に対するオルティスのまなざしは、こうして当初の犯罪法学的観点を脱し、キューバの新たなアイデンティティを構成する要素としての評価へと移っていく。1924年に『アフロキューバ語彙集』*Glosario de afronegrismos* が、その翌年には『公現祭のかつての祭り』*La antigua fiesta afrocubana del "Día de Reyes"*⁶⁾ が矢継ぎ早に出版されている。

だがその頃から、キューバの政情はきわめて不安定になっていた。砂糖価格の下落と1929年の世界恐慌がキューバ経済に深刻な影響を与える一方、独裁者ヘラルド・マチャドが憲法を改正して再選したことに対する反対運動が激化したのだ。オルティスもまた、マチャド体制に抗議して米国に亡命する。1930年にはワシントンで「キューバの諸悪における米国の責任（Las responsabilidades de Estados Unidos en los males de Cuba）」、「キューバが米国に望むこと（Lo que Cuba desea de los Estados Unidos）」と題する二つの講演を行って、米国に対しキューバの政情安定のための取り組みを要求した。帰国後、ポール・ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュとL. ガロワ編、『世界地誌』のスペイン語版の共同執筆と編集にあたったことが、やがて『対位法』を準備することになる。1936年に刊行されたこの『世界地誌』において、オルティスは「アンティール」の巻で砂糖とタバコについての章を執筆したのである。『対位法』は、その研究成果や記述を利用しつつ、文体や形式を変えて誕生した⁷⁾。

2. 砂糖と権力の言説

2.1 砂糖と異国性

『タバコと砂糖のキューバ的対位法』の前半のエッセーは、タバコと砂糖がいかに対照的か、それぞれの特徴、生産方法、消費のされ方などを様々な側面から対比的に論じていく。例えば栽培方法を見ると、タバコは交配と選別を行い、一年を通して注意深く育てられた後には、葉を巻く繊細な手作業が待っている。ところが砂糖は、より良い種を輸入に頼り、生育は放任され、山刀を使った野蛮な収穫後、機械によって精製される。また消費のされ方を比較すると、タバコは茎ではなく葉が有用であり、乾燥させ、火で煙となって吸われるのとは対照的に、砂糖キビの葉は無用で有用なのは茎であり、その汁からできた砂糖は液体に溶かして飲まれる。その他さまざまな対比を並べて、オルティスは次のようにまとめる。

Cuidado mimoso en el tabaco y abandono confiante en el azúcar; faena continua en uno y labor intermitente en la otra; cultivo de intensidad y cultivo de extensión; trabajo de pocos y tareas de muchos; inmigración de blancos y trata de negros; libertad y esclavitud; artesanía y peonaje; manos y brazos; hombres y máquinas; finura y tosquedad. En el cultivo: el tabaco trae veguerío y el azúcar crea el latifundio. En la industria: el tabaco es la ciudad y el azúcar es del campo. En el comercio: para nuestro tabaco todo el mundo por mercado, y para nuestro azúcar un solo mercado en el mundo. Centripetismo y centrifugación. Cubanidad y extranjería. Soberanía y coloniaje. Altiva corona y humilde saco. (Ortiz 2002: 140)

(細心の注意が払われるタバコと安心して放置される砂糖，一方は継続の仕事で他方は断続的工作，集中的栽培と拡張的栽培，少ない人手で済む作業と多くの人手を必要とする労働，白人移民と黒人奴隷売買，自由と奴隷制，職人技と肉体労働，器用な手と太い腕，人間と機械，繊細さと粗雑さ。栽培のためにタバコは小農園をつくり，砂糖は大農園をつくる。工場は，タバコが都市にあるのに対し砂糖は田舎にある。貿易において，我々のタバコは世界中を市場にするが，我々の砂糖の市場は世界に一つしかない。求心性と遠心性。キューバ性と異国性。主権と植民地。尊大な冠と粗末な袋。)

この引用にはまだ説明が必要だろう。現実的地平から出発したタバコと砂糖の比較が，キューバの政治，経済，歴史とも関わる隠喩へと自由に跳躍していくからだ。まずタバコから見ていこう。「白人移民」という換喩は，タバコ生産には特にカナリア諸島出身者が多く従事したことに基づく (Ortiz 2002: 237)。その経営は伝統的に小規模で，栽培や製造過程では「器用な手」が必要とされた。「尊大な冠」は，かつてハバナの最高のタバコがスペイン国王のために確保され，「国王の特権」と呼ばれたことに関係するだろう。キューバ産タバコの多くは，それゆえ冠，^{レガリーア}王権，^{インベリアル}皇帝，^{レイナ}女王，^{プリンシペ}王子といったブランド名がつけられていたのである (Ortiz 2002: 518)。また「自由」への置き換えは，19世紀後半，タバコ労働者が反奴隷主義やスペインからの分離主義によってキウエストに亡命したこと，また彼らが，そこを訪れたホセ・マルティに独立戦争のための資金を提供したことと関係がある。オルティスはタバコに自由主義，改革主義の象徴性も見ていたのだ。そしてキューバ産タバコが獲得した名声は，世界の輸入業者の買い付けを呼ぶ「求心性」を持つに至った。

その一方，砂糖生産には砂糖キビの刈り取りに大量の労働力と「太い腕」が必要であり，それが「黒人奴隷売買」を行う奴隷貿易導入の引き金となった。その結果，ごく少数の主人と多数の黒人奴隷からなる，いびつな「奴隷制」社会が形成される。そして砂糖産業の発展は，次第に自然破壊を進め，「田舎」に「大農園」をつくり，「機械」文明と莫大な外国資本の投下をもたらした。1902年に独立を果たし，砂糖は最大の輸出品であったとはいえ，キューバの経済構造は半植民地状態にあったのだ。また，タバコが豪華に包装され最大限の注意を払って扱われるのに対し，砂糖は麻の「粗末な袋」に詰められ乱雑に積み重ねられる。こうしてタバコと砂糖の対照は，単なる作物の次元を超越し，キューバのアイデンティティとの関連で語られる。そしてタバコは「キューバ性」と「主権」に，砂糖は「異国性」と「植民地」に結びつけられるのだ。次節では，これが砂糖をめぐる権力の言説への抵抗であることを見ていこう。

2.2 抵抗の言説

2005年に再版された『製糖工場—キューバ島の主要な製糖工場の景色のコレクション—』*Los ingenios: Colección de vistas de los principales ingenios de azúcar de la isla de Cuba* は，1857年，キューバ中部の町トリニダードの農園主，フスト・G・カンテロ Justo G. Cantero によって執筆されたもので，それぞれの製糖工場ごとに，フランス人画家エドゥアルド・ラプランテ Eduardo Laplante のリトグラフをあわせて掲載している。それはカラーで大判の豪華な装丁の本で，王立開発局 (Real Junta de Fomento) に捧げられたものだった。28枚の牧歌的で美しい農園や溪

谷の風景、港の倉庫、近代的な工場のリトグラフ、そしてそれぞれに添えられたテキストは、砂糖産業がキューバにもたらした豊かさや繁栄、進歩を誇示するものである。実際にプランテーションには、製糖工場を中心に、農園主の屋敷、大勢の奴隷が暮らす粗末なバラック、使役牛などの囲い場、菜園、病院などがあった。その周囲には広大な農園が広がり、サトウキビ運搬のための鉄道が敷設された。また、農園主の屋敷は奴隷の反乱に備えた「砦」であり、銀行、墓地、学校、養護施設としても機能していた。すなわち、プランテーションはそれ自体で一つの政治的、経済的、社会的組織を形成していたのだ（Benítez-Rojo 1996: 51-52）。しかしその一方でこの本は、当時まだ続いていた奴隷貿易⁸⁾や過酷な労働など、奴隷制の残酷な現実を完全に覆い隠している。ベニーテス・ロソホは、そのような図版とテキストの共謀に、権力の記念碑というべき詩的目隠し、あるいは神話の創造を見出した。そしてその「真正な」権力がキューバの法と国民性を規定し、砂糖の言説を強固にしていったと論じている（Benítez-Rojo 1987: 329-333）。

ところが1920年代に入ると、その権力の言説に抵抗する言説が盛んに生産され始めた。その嚆矢となったのが、最初『マリナ新聞』*Diario de la Marina*に発表されたラミーロ・ゲーラ Ramiro Guerra の諸論考であり、これらを編集した『アンティール諸島の砂糖と住民』*Azúcar y población en las Antillas*が1927年に刊行された。ゲーラは砂糖産業の近代化が、外国資本経営の製糖工場による大土地所有制の拡大を生み、小規模農園と小作農が急減していることに警鐘を鳴らしたのだ。第一次世界大戦期、砂糖価格の高騰は「札束の踊り（Danza de los millones）」と呼ばれた好景気を生んだが、1920年に価格は一転して下落した。『世界地誌』におけるオルティスの記述によれば、この年から1925年までに33もの製糖工場が閉鎖に追い込まれた。生きながらえたその他の工場も、多くが米国の銀行からの出資に頼ることになり、実質的に米国の砂糖会社の傘下に入ることを余儀なくされたのである。1927年には、175あった製糖工場中75は米国所有で、14がキューバと米国の共同経営、次いでカナダが10所有していた。砂糖生産量を見ると、それぞれが全体に占める割合は、順に62.5%、8%、10%であった（Santí 2002: 183）。すなわち、製糖工場の大半が外国の手中にあり、さらにこれらが生産量の80%以上を担っていたことがわかる。このような状況下で、キューバの政治エリートと教養エリートが分裂した。すなわち、「砂糖なくして国家なし」という考えのもと、砂糖産業のさらなる発展による「大きなキューバ（Cuba Grande）」を目指す前者の保守主義者たちと、大土地所有制の廃止、米国との関係見直しを要求し、「小さなキューバ（Cuba Pequeña）」への方向転換を主張する後者の改革主義者が対立したのだ⁹⁾。

その反響は文学にも現れた。1926年、アグスティン・アコスタ Agustín Acosta は『砂糖キビ収穫一戦いの詩』*La Zafra: Poema de combate*で、外国資本の製糖工場を次のように描写する。

Gigantesco acorazado	それは巨大な戦艦
que va extendiendo su imperio	領地をひろげながら
y edifica un cementerio	廃墟に
con las ruinas del pasado...!	墓場を建てていく...!
Lazo extranjero apretado	それはしたたかに確実に利益を上げる

con lucro alevoso y cierto;	異国の締めつけるロープ、
lazo de verdugo experto	それは農民の首にくくりつけられた
en torno al cuello nativo...	老練な死刑執行人のロープ...
Mano que tumba el olivo	それはオリーブの木を倒す手
y se apodera del huerto...!	そして農園を奪っていく...!

(Acosta 2004: 39)

効率化、大型化した最新の製糖工場の出現によって、キューバの旧式の製糖工場はもはや競争力を失い、打ち捨てられ、次々に廃墟と化していく。同時に、高額な土地の買い取りの話を持ちかけられ、それに応じる小農園主が後を絶たなかった。このような状況は、例えばアレホ・カルペンティエルの『エクエ・ヤンバ・オー』(1933)にも描出されている¹⁰⁾。そうして「キューバの大地の蜜を吸い取る糖尿病のタコ」(Acosta 2004: 101)は、平和と繁栄の象徴であるオリーブの木をなぎ倒し、残る農園主たちにも触手を伸ばす。アコスタは、目先の欲に目がくらんでしまう農園主たちに向かって、それが売国行為であると強く非難する。

No esperes que te adule, campesino cubano.
Tengo derecho a hablarte: por algo soy tu hermano...!
(...)
Tú has vendido tus tierras al billete extranjero;
has jugado a los gallos... Casi eres pordiosero...!
(...)
y entregaste el tesoro de tus tierras feraces,
sin comprender que en esa locura a que te dabas
la pobre patria tuya era lo que entregabas... (Acosta 2004: 91)
(キューバの農民よ、率直に話をさせてくれ。
私にはその権利がある。理由がどうあれ私は君の兄弟なのだ。
(...)
君は外国のお金と引き換えに土地を売り渡した。
賭けに出たってわけだ... 物乞いと変わらない...!
(...)
そして豊かな土地の宝を譲ってしまった。
その狂気の沙汰で、君が渡しているのが
哀れな祖国であることもわからずに...)

こうしてアコスタは、ゲーラと同様に、キューバの小農園主が、経営の苦しさから巨大な製糖工場による土地の買い占めに屈してしまっていることの深刻さを説いているのだ。そしてこの一節は、『砂糖キビ収穫一戦いの詩』の刊行直後、オルティスが『キューバ隔月誌』*Revista Bimestre Cubana* の書評で引用した箇所である。そこでオルティスは、この長編詩を全キューバ

人の必読書として推薦した。

実は『対位法』の初版には、ナショナリストの歴史家ポルテル・ビラー Portell Vilá の序文がっていた。そこでビラーは、砂糖産業がキューバのアイデンティティであるかのような理論を構築した経済学者を批判し、砂糖産業を生命の液を吸い取る異国の巨大な寄生虫に喩えた。そして、独立戦争がキューバ経済の再組織化の機会を提供したにもかかわらず、米国の介入によってキューバ人のプロレタリアート化が進み、実質的に植民地状態が継続していることを訴えている（Ortiz 1995: lxvi-lxviii）。ビラーは革命後亡命したため、この序文は革命後の第二版からは削除されてしまった。それゆえ当時の政治的コンテクストにおいて、オルティスがどのような立場を表明したのかが見えにくくなっている。しかし当初、このようなビラーの序文が『対位法』に掲載されていたこともまた、砂糖の権力の言説に対して、ゲーラやアコスタの抵抗言説に同調するオルティスの姿勢を鮮明にする。実際、『対位法』においてオルティスは、キューバの富を奪い取る砂糖産業のシステムをヘビに喩えて次のように述べる。

Cuba no será en verdad independiente sin que se libre de esa retorcida sierpe de la economía colonial que se nutre de sus campos, pero estrangula a su gente y se enrosca en la palma de nuestro escudo republicano, convirtiéndola en un signo del dólar extranjero. (Ortiz 2002: 214)
(キューバは、そのうねった植民地経済のヘビから逃れることなくして、本物の独立国になれないであろう。そのヘビはこの大地から栄養を得て、人々を絞め殺し、我らの共和国の盾であるヤシにぐるぐると巻きつくと、異国のドルのしるしに貶めてしまうのだ。)

オルティスはこうして、キューバの国樹である大王ヤシ、すなわち国家の一つの象徴が、ヘビに喩えられた砂糖産業によって、米国資本の象徴（\$）にとって代わられつつあるという危機感を表明している。キューバの大地を破壊する戦艦、生命の液を吸い取る寄生虫、農民の首を絞めるヘビ。砂糖産業への依存がもたらしている危機的現実に対し、これらの隠喩を通して、砂糖の権力の言説に反旗を翻す教養エリートたちの姿が浮かび上がってくるだろう。そしてオルティスは、タバコをその反逆の旗印としたのだ。

3. トランスカルチュレイション

3.1 トランスカルチュレイションとキューバ性

1492年、コロンブスがキューバに到着した時、先住民のタイノ族はスペイン人たちに儀式的挨拶を行い、タバコを贈った。インディオにとってこれは価値あるものに違いないとコロンブスが推測した通り、タバコはタイノ族にとって、社会的、宗教的に様々な機能を果たすものであった。まずタバコを差し出すことは、相手に平和と友好の意思を示す行為を意味した（Ortiz 2002: 150）。また、魔術師たちはタバコの精神的高揚、陶酔効果を利用した。すなわち、葉を粉末にしたものを鼻から吸引し、トランス状態になると、神秘の力セミー（cemi）と会話をして病気の治療方法を告げたのである。空に昇るタバコの煙は、その神聖なセミーが可視化されたものと考えられ、加入儀礼や雨乞いの儀式で神々に捧げられたほか、罪や悪の浄化作用を持つ魔術

としても用いられた (Ortiz 2002: 299, 350)。それゆえオルティスは、タバコを「野蛮な魔術的贈り物」とも呼んでいる (Ortiz 2002: 193)。しかしながら、タバコはやがて黒人に受容され、その後白人の手に渡り、次第に変容していく。

全部で25の「追加章 (capítulos adicionales)」からなる『対位法』の後半は、「ハバナ産タバコの歴史、民族誌そしてトランスカルチュレイション」のグループと「アメリカ大陸における砂糖と黒人奴隷制の開始」のグループに分かれる¹¹⁾。つまり、タバコの変容は前者のグループで語られるのだが、オルティスはそれを「トランスカルチュレイション」と名づけた。そして第2章の「『トランスカルチュレイション』の社会現象とキューバにおけるその重要性について」において、これがキューバの歴史を理解するうえで不可欠な概念であると述べる。

Entendemos que el vocablo *transculturación* expresa mejor las diferentes fases del proceso transitivo de una cultura a otra, porque éste no consiste solamente en adquirir una distinta cultura, que es lo que en rigor indica la voz angloamericana *acculturation*, sino que el proceso implica también necesariamente la pérdida o desarraigo de una cultura precedente, lo que pudiera decirse una parcial desculturación, y, además, significa la consiguiente creación de nuevos fenómenos culturales que pudieran denominarse neoculturación. Al fin, como bien sostiene la escuela de Malinowski, en todo abrazo de culturas sucede lo que en la cópula genética de los individuos: la criatura siempre es distinta de cada uno de los dos. En conjunto, el proceso es una *transculturación*, y este vocablo comprende todas las fases de su parábola. (Ortiz 2002: 260)

(我々の考えでは、「トランスカルチュレイション」という語が、ある文化から他の文化への変容のプロセスの様々な段階をよりよく表現する。というのもこのプロセスは、他の文化を獲得するという、英語の「アカルチュレイション」という語が実際のところ指すものだけでなく、部分的な「脱文化変容」と呼べるだろう前の文化の喪失も必然的に含むのであり、さらにその結果として、「新文化変容」と命名することができるであろう新しい文化現象の創造をも意味するからだ。結局のところ、マリノフスキ学派がはっきりと主張しているように、文化の完全な合体においては個々の遺伝子の結合と同じことが生起する。すなわち、胎児は二人のどちらとも常に異なるのだ。全体としてそのプロセスは「トランスカルチュレイション」であり、この語はその喩えのすべての段階を含んでいる。)

当時、特に米国の社会科学、民族学の分野において、ある文化が異文化の影響を受けて変容する現象には「アカルチュレイション (acculturation)」という用語が使われていた。しかし『対位法』の序文でプロニスワフ・マリノフスキ¹²⁾が指摘するように、この語はその接頭辞 (a- < ad-) によって、周縁文化は支配文化の恩恵を受け、その一部となるべきであるという西欧中心的思想を孕んでいる (Ortiz 2002: 124-125)。用語の問題は、これを文字通りスペイン語に翻訳した *aculturación* においてより深刻であった。なぜならスペイン語の接頭辞 a- は、「非一、無一」という欠如、否定を表すため、周縁文化の否定を意味しかねないのだ (Iznaga 1989: 54-55)。それと比較すると、トランスカルチュレイションの接頭辞 (trans-) が示唆するのは、一方から他

方への不平等な押しつけや、片方の文化の否定ではなく、別の状態への変化である。

キューバでは、先住民のシボネイ族、次いでタイノ族が住んでいたところに、1492年以降、スペインからアンダルシア人、カスティーリヤ人、バスク人、カタルーニャ人が、地中海からはジェノバ人、フィレンツェ人、ユダヤ人、そしてアフリカ北部のベルベル人などがやって来て最初の植民が行われる。やがて先住民が激減すると、代わりに労働力として、マンディング族、ヨローフェ族、ダホメイ族、ヨルバ族など、アフリカ大陸の様々な地域から奴隷貿易で黒人が運ばれてきた。その後さらに、フランス人、イギリス人、中国人の移民も到着する（Ortiz 2002: 256-260）。オルティスは、そのような多様な民族が次から次へと接触することで生まれた、非常に複雑なキューバの文化変容を包摂する概念として、「アカルチュレイション」に代わる「トランスカルチュレイション」を提起したのだ。ではその過程に含まれる「脱文化変容」と「新文化変容」に注目して、この概念の背後にあるオルティスの思想をさらに解明していこう。

『対位法』の出版前年、オルティスはハバナ大学で「キューバ性の人間的要素（Los factores humanos de la cubanidad）」と題する講演を行った。そこではキューバにおける人種的・文化的混淆が、米国流の「るつぼ」ではなく、アヒアコという料理のイメージで喩えられる。

Y en todo momento el pueblo nuestro ha tenido, como el ajiaco, elementos nuevos y crudos acabados de entrar en la cazuela para cocerse; un conglomerado heterogéneo de diversas razas y culturas, de muchas carnes y cultivos, que se agitan, entremezclan y disgregan en un mismo bullir social (…). Mestizaje de cocinas, mestizaje de razas, mestizaje de culturas. Caldo denso de civilización que borbotela en el fogón del Caribe... (…). Acaso se piense que la cubanidad haya que buscarla en esa salsa de nueva y sintética succulencia formada por la fusión de los linajes humanos desleídos en Cuba; pero no, la cubanidad no está solamente en el resultado sino también en el mismo proceso complejo de su formación, desintegrativo e integrativo (…). Lo característico de Cuba es que, siendo ajiaco, su pueblo no es un guiso hecho, sino una constante cocedura. (Ortiz 1993b: 6)

（いつの時も我々キューバの民は、アヒアコのように、煮込むために鍋に入れたばかりの新しい、生の材料を受け入れてきた。それは様々な人種や文化、たくさんの肉や野菜からなる異質なもののごった煮で、一つの社会的な煮えたぎりの中で、かき回され、混じり合い、分解する（…）。それは料理の混血であり、人種の混血であり、また文化の混血だ。カリブのかまどで沸騰する文明の濃厚なスープ...（…）ひよっとするとキューバ性はこの国で溶けた人間の血統の融合によって形成される、その新しく、凝縮した栄養満点のソースに探さなければならぬと思われるかもしれない。しかしそうではない。キューバ性は出来上がりだけでなく、分解と統合が行われるその複雑な形成過程にもある（…）。キューバが特異なのは、アヒアコであるがゆえに、その民は完成したシチューではなく、継続される煮込みである点だ。）（傍点、引用者）

「分解と統合が行われるその複雑な形成過程」がトランスカルチュレイションを指すことに疑いはない。したがってその過程を経たアヒアコは、「キューバ性」を象徴する料理ということだ。

では、オルティスがアヒアコのトランスカルチュレイションをどのようにとらえていたのかを具体的に見てみよう。最初のアヒアコはインディオのもので、そこにはフチア、イグアナ、ワニ、キューバボア、カメ、ホラガイ、その他の動物や魚が入っていた。スペイン人が到着すると、彼らは先住民の肉を捨てて、牛肉、干し肉、豚の肩肉を入れ、カボチャ、カブを加える。アフリカ人は、ホロホロ鳥、バナナ、ヤマイモを入れ、新たな調理法を導入した。次いでアジア人は、東洋の神秘的なスパイスを振りかけ、フランス人は細やかな味覚で、香辛料の野性味を和らげる。そして米国人が土鍋を金属鍋に代え、焚火、雨水、海水の塩を用いていた料理を家庭でできるように効率化、簡略化、機械化した。そしてこれらすべてのプロセスを経て国民的なアヒアコがつくられていると述べる (Ortiz 1991: 15-16)。

オルティスが提起したトランスカルチュレイションという新語の意義は、マリノフスキが認めたように、文化接触における不平等な押しつけの概念を否定したことだったはずだ。だが、それぞれの段階における異質な材料やスパイスの接触が、両者の力関係に影響されない分解と新しいアヒアコの創造に向かっているようには思われない。そもそもインディオのアヒアコは、スペイン人によってその材料をほとんど捨てられているのだ。ヨーロッパ人にとっての「異物」を除去され、フランス人によって味を整えられた後、米国人の文明的貢献がアヒアコの形成を仕上げたとするなら、オルティスにとってトランスカルチュレイションとは、結局のところ西欧化・近代化に他ならない。それはパトリア・カトイラ Patricia Catoira が指摘するように、新しい文化的アイデンティティ・モデルの構築と権威づけを行う、不平等な選択のプロセス (Catoira 2005: 187) とも呼べるだろう。しかしその一方で、この概念は何よりもキューバ性を語るための特殊なレトリックであることに気づかされる。つまり、変容前はキューバに土着的で「野蛮なもの」であったのが、段階的な西欧化による「進化」を遂げて、ついにキューバを代表する産物に至るプロセスこそ、オルティスがこの語に託した意味と考えられるのだ。そしてアヒアコ同様、そのレトリックの格好の材料をオルティスに提供したのがタバコだった。

3.2 タバコのトランスカルチュレイション

1535年、インディアスの最初の年代記作家ゴンサロ・フェルナンデス・デ・オビエド Gonzalon Fernández de Oviedo は、『インディアス博物誌ならびに征服史』*Historia General y Naturaleza de las Indias, Islas y Tierra Firme del Mar Océano* において、黒人がタバコには仕事の疲れを取る効果があるといって、インディオのタバコ吸引の習慣を受け継ぎ、これを栽培していたと記録している (Ortiz 2002: 307)。同じ奴隷の境遇が、インディオと黒人の接触機会を多く生み、黒人はスペイン人よりも先に喫煙の習慣を身につけたのだ。しかし新大陸帰りのスペイン人がタバコを持ち帰ると、やがてヨーロッパにおいて「極めて過激なトランスカルチュレイション」 (Ortiz 2002: 442) が起こる。その陶酔効果や中毒性によって、一部の聖職者からは「悪魔」と非難される一方、タバコの葉のエキゾティズムが、まず観葉植物としての受容を促した。そしてタバコの強い香と煙には、例えばヒステリーの治療効果があると認められ、薬草として広く用いられるようになる (Ortiz 2002: 443)。1560年には、タバコの葉がフランス王妃カトリーヌ・ド・メディシスの皮膚病を治したという評判が広まり、その効能がヨーロッパ諸国に知れ渡った (Ortiz 2002: 226)。しかし万能薬としての過剰な宣伝と弁護は、時に喫煙の快楽を求める真

の目的の隠蔽でもあった。イギリスで1617年に刊行された『厳粛で愉快な論争』*A Solemne Iovial Disputation*においては、筆者のリチャード・ブラスウェイト Richard Brathwait がさまざまなタバコの吸い方を紹介している。当時実際に、喫煙の芸術的技巧を教える講師が出現し、巧みなステップや軽快な動作と組み合わせて、美しい煙の輪やらせんを公の場で披露するのが流行していた。一方、当時教会の腐敗が深刻な状態にあったスペインでは、喫煙に対して寛容な態度が取られ、喫煙自体は罪ではないが、吸い過ぎは罪になりうるとされた。司祭の中にはタバコの商売で大西洋を往復する者も現れ、17世紀には、男も女も、俗人も司祭も関係なく、教会の中で喫煙していた（Ortiz 2002: 465-493）。また前述したように、最高のタバコは「国王の特権」としてスペイン国王のために取っておかれたのである（Ortiz 2002: 518）。

このように興味深いエピソードは、『対位法』において枚挙にいとまがない。そしてそれらの集積が、インディオのもともとの利用法と比較した時に、「極めて過激なトランスカルチュレイション」としてオルティスの目に映ったのだ。しかしながら、そのプロセスでオルティスにとって重要なのは、アヒアコと同様、タバコの西欧化と「進化」であった。

La yerba india no logró su definitivo injerto en la troncalidad de la cultura de los pueblos blancos, ni fue en ellos naturalizada, sino por esa novísima función económica que le encontró, la de servir para grandes cosechas y esquilmos tributarios con que satisfacer las necesidades monetarias de los gobiernos. Y entonces ya el tabaco queda plena y socialmente institucionalizado en los pueblos blancos. Lo que entre los indios fue socialmente una institución de índole mágico-religiosa, entre los blancos deviene una institución de carácter económico; fenómeno carcterístico de una completa transculturación. (Ortiz 2002: 473-474)

（インディオの草が白人文化の幹に決定的に移植され、白人の間に根づくことが可能になったのは、そのごく新しい経済的機能、すなわち政府の財政的必要性を満たす大量収穫と税金収入に資する機能を持ちえたからだった。そのときタバコは、白人の間で完全に社会的に組み込まれたのである。インディオの間では、魔術的・宗教的性質を持っていた社会制度が、白人の間では経済的性格の制度に転じたのであり、それは完全なるトランスカルチュレイションに特徴的な現象である。）（傍点、引用者）

「野蛮な」インディオのタバコは、すぐに黒人に評価され取り入れられた。そして白人の手によってさまざまな変化を遂げ、ついに白人社会に組み込まれ、経済的機能を持つまでに「進化」した。オルティスにとって、このような変容が「完全なトランスカルチュレイション」であり、タバコがキューバ性を獲得した理由なのだ。

3.3 タバコの異国化

ところが『対位法』は、砂糖の異国性に対するタバコのキューバ性の勝利を謳って終わらない。すなわち、異国化と資本主義の進行によって、タバコは砂糖に接近するのである。その最初の引き金となったのは、1762年、イギリスによるハバナの占領だった。スペイン帝国外に流出するキューバ産タバコが増大し、やがて1788年にハンブルクで最初の葉巻工場が造られる。1854

年に勃発したクリミア戦争では、兵士たちの間で紙巻きタバコが流行し、変形された安価なタバコの流通が加速した。キューバにおいても、1825年、タバコの輸出が自由化されると、質より量の風潮が強まり、タバコの「市場主義による売春」(Ortiz 2002: 231)が開始された。そして1868年から78年に至る10年戦争の影響で、多くのタバコ農家がキーウエストに亡命したことが、タバコの「脱キューバ化」を決定的にする。

Esto se agrava con las crecientes importaciones en Cuba de cigarrillos hechos fuera del país, con tabaco extranjero y con sabores también extraños. Y este proceso de extranjerización no ha cesado. El maquinismo y el capitalismo financiero, que no son cubanos, lo fuerzan más y más, manteniendo a Cuba en la condición económica colonial (…)(Ortiz 2002: 234)

(このことは、海外で製造された紙巻きタバコの輸入増加や、味も奇妙な外国製のタバコによって深刻化している。そしてこの異国化の過程は終わっていない。キューバに似つかわしくない機械主義と金融資本主義がこれを一層強化しており、この国を植民地経済の状況に貶めている(…))

トランスカルチュレイションが結果として招いた機械主義と資本主義の浸透によって、タバコの「キューバ性」と「主権」の象徴は、砂糖と同様、「異国性」や「植民地」に変貌しつつあるとオルティスは見ていたのだ。では『対位法』は、キューバ性の喪失を語るテキストなのだろうか？

エンリコ・マリオ・サンティは、上述の結末にオルティスのノスタルジーを読み取っている。そして『対位法』は、資本主義によってタバコと砂糖の対照性がなす国家アイデンティティの消失を予見し、嘆いている危機のテキストであると論じた(Santi 2002: 57)。異国化される前のタバコに、オルティスがノスタルジーを感じていた可能性は確かにある。しかしオルティスが、タバコと砂糖の対照性にキューバのアイデンティティを見ていたというサンティの理解には疑問が残る。なぜならここまで見てきたように、『対位法』は砂糖の言説に対する抵抗言説の一部をなすのであり、オルティスがキューバ性を認めたのは、タバコに起こったトランスカルチュレイションという複雑な文化変容のプロセスにこそあったからだ。

私たちの考えでは、『対位法』においては、二つの作物についての記述内容だけでなく、サンティが「野蛮スタイル」と呼んだ、構造や文体自体にオルティスの戦略を読み取る必要があると思われる。そのような観点に立つと、注目すべき点が二つある。第一に、タバコと砂糖の対照性が、キューバ的対位法というキューバ民衆音楽の形式によって語られている点。第二に、前半のエッセーにおいて、擬人化されたタバコと砂糖は、その結末で突然婚姻を結び、両者の間にアルコールが誕生する点である。これらについては後編でくわしく論じるが、結論からいえば、『対位法』はサンティがいうような「危機のテキスト」ではなく、チョテオのテキストである。ただしそのチョテオは、当時一部のキューバ知識人によって国民的悪癖と非難されていた不敬なユーモアではない。チョテオに対するオルティスの態度変化や、「はじめに」で言及した研究カードを分析すると、チョテオはオルティスによってトランスカルチュレイションの産物として位置づ

けられたことがわかる。つまり『対位法』には、アヒアコやタバコとは別のキューバ性が提示されていると考えられるのだ。そこには、『対位法』以降、なぜオルティスが黒人音楽や楽器の「進化」に研究の焦点を当てていくのかを明らかにする糸口も見えるように思う。

4. おわりに

本稿のまとめとして、キューバ性とトランスカルチュレイションをめぐるオルティスの思想について振り返り、補足しておこう。犯罪法学者としてキューバの近代化の道を探った出発点から、オルティスの思想はその根底において一貫している。実際、前述の『キューバ人よ共に…（熱帯の心理）』に所収された「棘なし（Sin púas）」には、すでにトランスカルチュレイションを予見させる一節がある。米国の植物学者ルーサー・バーバンク Luther Burbank が、品種改良によって棘のないサボテンの栽培に成功した話題を取り上げて、オルティスは優生学的な混血による文化進化論を展開する。

Acaso nuestro porvenir nacional no sea en el fondo más que un complicado problema de selección étnica –fisiológica y psíquica. Quizás no se trate sino de conseguir que el espinoso cactus de nuestra psiquis criolla (desgraciadamente cruzado con especies de escaso jugo y de muchas púas) vaya por escogidos cruzamientos con cactus jugosos y sin espinas, perdiendo estos obstáculos a su utilización en la obra civilizadora de los pueblos, y adquiera los jugos morales y mentales de que carece para poder servir de sustanciosa alimentación social. (Ortiz 1993a: 54)

（もしかすると我々の国家の将来は、根本的なところでは、民族選択—生理的、精神的な—の複雑な問題にすぎないのかもしれない。それはおそらく、我々クリオーリオの精神（残念なことにわずかな液汁しか含まず棘だらけである）の荒々しい棘が、みずみずしく棘のないサボテンとの選択的交配によって、国民の文明化事業での活用のためにその障害をそぎ落とし、社会的な滋養として役立たせるのに欠けている道徳的、精神的液汁を獲得するための問題に他ならないだろう。）

「民族選択」に関連してオルティスは、1906年の「キューバにおける移民についての実証主義犯罪学による考察（Consideraciones criminológicas positivistas acerca de la inmigración en Cuba）」および「犯罪学の観点からの移民（La inmigración desde el punto de vista criminológico）」で、人種のカテゴリー化を行っている。それによれば、犯罪率が高いことを根拠に、中国人と黒人は原始的、あるいは野蛮な精神を持っていると見なされ、白人の人種的優位が主張される。そしてキューバは、スペイン、イタリア、バルカン半島の国々からの移民を優先的に受け入れるべきと結論づけているのである（Orovio, Puig-Samper 1998: 21-22）。

その後オルティスは、政治家を経て、民俗学研究による混血の文化的アイデンティティの探究に向かった。しかしその結果、オルティスの著作には、国家近代化の追求とキューバ性の模索、すなわち西欧化と脱西欧化の相反する方向に同時に進むという矛盾が起きている。るつぽに代

わるアヒアコ、アカルチュレイションに代わるトランスカルチュレイションという用語の置き換えは、きわめてポストコロニアル的な態度である。しかしここまで見てきたように、根底には西欧中心主義と近代化の思想があることが露見している。そして、『対位法』の冒頭で新語トランスカルチュレイションの有効性を認めるマリノフスキの序文もまた、キューバの独自性を構築しようとしつつ、西欧からの権威づけを欲するという、奇妙に捻じれたオルティスの態度を暴露するものである。

註

- 1) ドイツの地理学者アレクサンダー・フォン・フンボルト Alexander von Humboldt (1769 - 1859) は、1800年から1801年にかけてキューバを訪れ、その旅行記を残している。オルティスが「キューバの第三の発見者」と最初に称されたのは、ファン・マリネジョ Juan Marinello による追悼文である。
- 2) ウルトライスモとは、1918年、カンシーノス・アセンス Cnansinos Assens のインタビュー記事を出発点とする文学刷新運動で、とりわけ当時のスペインにおけるロマン主義的感性の超越が試みられた(坂田 2010: 48-52)。
- 3) 実際のところ、キューバにおける「混血」の言説には幾筋もの伏流が合流しており、それぞれの源流に遡れば、異なる動機と方向性を持つ複数の思想にたどり着く。例えばキューバの国民詩人ニコラス・ギジェンの「ムラート」のレトリックは、黒人の視点から、人種的平等を目指して生み出されたものであり、本稿で見るオルティスの思想とは大きな隔たりがある。ギジェンのレトリックについては拙論(安保 2011a, b)を参照されたい。
- 4) オルティスは「いわゆる民事損害賠償についての研究の基礎 (Base para un estudio sobre la llamada reparación civil)」と題する論文でマドリード大学から博士号を授与されている。その研究の目的は、当時のキューバ社会の現実に即して、より優れた、人道的な刑法案を示し、被害者学に貢献することであった (López Ximeno 2011: 47)。
- 5) 「アフロ・キューバの暗黒世界 (Hampa afro-cubana)」と題する三部作は、『黒人呪術師』に始まり、『黒人奴隷』そして『黒人やくざ』に完結するシリーズが計画された。「黒人やくざ」とは、18世紀から19世紀の前半にかけてキューバ下層社会に存在した黒人の悪党、けんか好き、人殺しのことを指す (Ortiz 1993b: 77)。
- 6) 奴隷制時代のキューバにおいて、1月6日の公現祭は、一年で唯一奴隷に自由が認められた日であった。その日、同じアフリカのルーツを持つ部族が、それぞれ伝統的な衣装を着て、音楽を演奏し、踊り、人々にアギナルド(チップ)を求めながら街を練り歩いた。オルティスはこの書で、そのルーツやかかつての様子を論じている。
- 7) 『世界地図』の「アンティール諸島」の巻(全20章)のうち、第10章で砂糖、第11章でタバコが扱われている。オルティスは同1936年、「砂糖とタバコの経済的対照性」という論考を『キューバ隔月誌』*Revista Bimestre Cubana* (Vol. XXXVIII, Número 2) に発表しており、そこでさらに『対位法』への接近が観察される。
- 8) キューバにおける奴隷貿易は1886年まで続いた。これは1888年に廃止となったブラジルに次ぐ遅さであった。
- 9) 両エリート間の溝は、1934年、最大の輸出国である米国で、フランクリン・ルーズベルト大統領が砂糖割当制度を停止し、砂糖関税が上昇したことによって深刻さの度合いを増すことになる。
- 10) 『エクエ・ヤンバ・オー』には、例えば次のような一節がある。「砂糖の値段がはねあがり、ウォール街の黒板で上昇線をえがくにつれて、州地図の上では工場が手に入れた土地の面積が染みのようにひろがっていった。多くの零細農家が、アメリカ人経営の会社側から、のどから手が出るほどの高価で畑を

買いたいと言われ、百年以上もたがやしてきた畑の権利書を手放したのである。」（カルペンティエール [平田渡訳] 2002: 22)

- 11) 全 25 章のうち、第 1 章は後半部の構造の説明であり、残りの 14 章がタバコをめぐるグループ、10 章が砂糖をめぐるグループに分類される。しかし各章はグループごとにまとまっておらず、複雑に交差しながら展開する。詳しくは本稿の続編で扱う。
- 12) マリノフスキは当時世界的に著名な人類学者であったが、1939 年にハバナを訪れた際にオルティスと知り合った。そこから始まった交流で、マリノフスキは『対位法』に序文を寄せた。また、オルティスは当初、『対位法』の後半部を「補遺 (apéndice)」としていたが、イエール大学に客員教授として着任していたマリノフスキは、米国では「補遺」は「かざり」のようなものにしか捉えられないので変更するようにアドバイスした。「追加章」という呼称はそのような経緯でつけられた。

参考文献

- 安保寛尚. 2011a. 「ニコラス・ギジェンの『ソンのモチーフ』の誕生について」, ラテンアメリカ研究年報 No.31, pp.29-61.
- . 2011b. 「ボンゴが語る神話と祝祭的ナショナリズム —ニコラス・ギジェンの「ムラート」のレトリックの誕生について—」, 『イスパニカ』 No.55, pp.25-44.
- 今福龍太. 2015. 『わたしたちは難破者である』, 河出書房新社.
- カルペンティエール, アレホ. 2002. 『エクエ・ヤンバ・オー』 平田渡訳, 関西大学出版.
- 工藤多香子. 1997. 「言説から立ち現れる「アフロキューバ」—フェルナンド・オルティスの文化論をめぐる考察—」, アジア・アフリカ言語文化研究 No. 54, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.55-76.
- 坂田幸子. 2010. 『ウルトライスマーモドリードの前衛文学運動』, 国書刊行会.
- Acosta, Agustín. 2004. *La zafra: Poema de combate*, Editorial Nomos S.A., Colombia.
- Benítez-Rojo, Antonio. 1987. "Nicolás Guillén and sugar" in *Callaloo* No.31, Volume10, No.2, The Johns Hopkins University Press, pp.329-351.
- . 1996. *La isla que se repite: El Caribe y la perspectiva posmoderna*, Ediciones del Norte, Hanover.
- Cantero, Justo G. 2005. *Los ingenios: Colección de vistas de los principales ingenios de azúcar de la isla de Cuba*, Ediciones Doce Calles, Madrid.
- Catoira, Patricia. 2005. "Transculturation à la Ajiaco: A Recipe for Modernity" in *Cuban Counterpoints: The Legacy of Fernando Ortiz*, Lexington Books, Oxford, pp.181-191.
- Iznaga, Diana. 1989. *Transculturación en Fernando Ortiz*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana.
- López Ximeno, David. 2011. *Fernando Ortiz ante el enigma de la criminalidad cubana*, Fundación Fernando Ortiz, La Habana.
- Orovio, Conuelo Naranjo y Puig-Samper, Miguel Ángel. "Delincuencia y racismo en Cuba: Israel Castellanos versus Fernando Ortiz" en *Ciencia y Facismo* (Editores: Rafael Huertas y Carmen Ortiz), Ediciones Doce Calles, S. L., Madrid, pp.11-23.
- Ortiz, Fernando. 1973. *Órbita de Fernando Ortiz*, Unión de Escritores y Artistas de Cuba, La Habana.
- . 1991. *Estudios etnosociológicos*, Editorial de ciencias sociales, La Habana.
- . 1993a. *Entre cubanos: psicología tropical*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana.
- . 1993b. *Etnia y sociedad*, Editorial Letras Cubanas, La Habana.
- . 1995. *Cuban Counterpoint Tobacco and Sugar*, Duke University Press, Durham and London.
- . 2001. *Los negros brujos*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana.
- . 2002. *Contrapunteo cubano del tabaco y el azúcar*, Ediciones Cátedra, Madrid.

Santí, Enrico Mario. 2002. *Fernando Ortiz: Contrapunteo y transculturación*, Editorial Colibrí, Madrid.